

[第7回／笑い：をかし～狂言／11月5日]

テキストとしては「笑いの総合科学をめざして【吉本寄付講座】能・狂言と日本の笑い」のレジメを配布した。学部生対象の全学共通科目なのだが院生たちには情報は伝わっていないであろうことを考慮してのことである。公開をあえて許可していないのは、近々新曜社から出版されるからである。

井上宏元関西大学教授が立ちあげられた「日本笑い学会」以来、笑いの研究は目覚ましい発展を遂げている。分野も脳科学・遺伝学・哲学等々実に幅広い。私は筑波大学名誉教授村上和夫氏の講演を聴き感銘を受けた。ヒトゲノムには30億の情報が書き込まれたDNAがあるが、解明されているのはせいぜい30パーセントであって、眠っている遺伝子を呼び覚ますのは「笑い」であるというのだ。人生を生き抜く力をもらえそうな御著書の『生命のバカ力』（講談社新書）を薦める次第である。

能楽では「翁面」に注目した。神聖な神事ごととして知られる翁面は、よく見ると笑っていらっしゃる。〈翁〉の成立は観阿弥・世阿弥の能楽大成以前からで〈翁〉を演じるグループは鎌倉時代以前に遡るとは表章氏の説である。私は〈翁〉の古称「式三番」は『古今和歌集』の「みたりの翁」に見られると提言してみた。のちに折口信夫に「翁さび」（『後撰和歌集』）の指摘があるのに気付いた。

田口和夫氏の「誑惑の法師」説は狂言師のルーツを考える上で貴重である。狂言台本はいわゆる『天正狂言本』にまでしか遡れないし、狂言の成立も1334年だとの定説がある。騙し騙されても皆が面白がった『宇治拾遺物語』の記述こそ芸能僧の存在だったというのである。

そのほか記紀・『新猿楽記』の記述・世阿弥の笑いのとらえ方、謡曲の中の笑いにも触れたが、誰でも知っている〈附子〉も必ずしも水飴だと理解されてきた訳ではない例をあげ、狂言作品研究の奥深さにも触れたつもりである。